

ソロモンの  
二重螺旋

BLASSREITER FAN BOOK  
XARGIN / JOSEPH R18

ソロモンの

一重螺旋

この作品には  
暴力シーンやグロテスクな表現、  
男同士の性的な描写が含まれています  
18歳未満の方、上記の内容に  
耐性の無い方は閲覧をご遠慮ください

「あう……」

肛門から肉棒を引き抜かれる感触に、ジョセフは掠れた声で呻き声を漏らした。先ほどまで散々蹂躪されていた彼の肉穴がひくりと蠢き、血の混じった精液が一滴流れ出る。そんなジョセフから身を離し、ザーギンは誰にともなく呟いた。

「さて……そろそろ動いている頃合いかな」

彼らが今いるなだらかな丘を下り森を越えた先には、山や森に挟まれた僅かな平地に位置する小さな村があった。だがその村には死の影が忍び寄っていた。数刻前、ザーギンの命を受けたベアトリスの手で村に数体のデモニアックが放たれたのである。それを阻止しようとしたジョセフは逆に返り討ちに遭い、揚げ句の果てに陵辱されてこの様である。

「ザーギン……」

立ち上がる力すら根こそぎ奪われて無様な姿で地面に転がり、ザーギンの手で蹂躪しつくされたジョセフが、縋るような、だが揺るぎない眼差しで訴えかけてきた。

ジョセフの半分脱がされた衣服は申し訳程度に身体

に纏わりついているだけで服としての機能を果たさず、あられもなく曝け出された肛門からは白濁した液が滴り落ちて地面にしみを作っていた。

「ザーギン、もう止めよう。こんな事は。世界を終わらせ、人という種を滅ぼしたとしても、それは救いにはならない。ならないんだ」

「ジョセフ、私にはこの世界を終わらせ、新しく作り替える義務がある。もちろん君にもだ。我々には神の意志による滅びと世界の再生を成就させる義務がある」

「違う。それは神の意志ではない。滅びによる救済など、主は望んではおられない筈だ」

ジョセフを見つめるザーギンの目に失望とも哀れみともつかない色が浮かんだ。

「やはり君とはどこまで行つても分かり合えないまま、か。できれば君と道を違えたまま事を成すことは避けたいが……仕方がない」

そしてザーギンはジョセフの上に馬乗りにしたかかると、ジョセフの膺の下辺りに右の手の平をそっと押し当てた。

「貴様、何を……ぐっつ!!」

ジョセフが起き上がろうとした時、ザーギンの背か

ら四本の触手が伸ばされた。触手は逃れようとする  
ジョセフの両手を捉えてしつかりと絡み付き、左右に  
大きく広げた形で地面に拘束した。

「くそっ！ 離せっ！」

磔刑のように、あるいは展翅台に留められた昆虫の  
ように拘束されたジョセフが吠える。何とかして鋼の  
触手を振りほどこうと身を振ったがびくともしない。  
ザーギンはジョセフの抵抗を気にも留めない様子で、  
ジョセフの下腹を検分するように撫でさすっていた。

「何の真似だ……っ、ザーギン……！」

「少しの間、大人しくしていてくれるかな」

「貴様、何の……っ……ぐ……が……ああ……」

ジョセフの腹に添えられていたザーギンの両手が蒼  
白い燐光を帯びた。その瞬間、ジョセフの腹の内から  
耐えがたい激痛が沸き上がる。ザーギンの手が当てら  
れた部位が高熱を帯び、文字通り焼けるような痛みを  
引き起こす。腹を引き裂かれ、内臓を直接搔き回され  
るかのような苦痛がジョセフを責め苛んだ。

「ぐううっ……！ うぐあっ、うがあああ！」

身を裂く苦痛から逃れようと拘束を振り払い暴れよ  
うとしたが、鋼鉄の触手は微動だにせず、ジョセフの  
身体をしかと地面に押さえつけたままだ。

「ああっ、ぐああっ、があああっ！」

熱はジョセフの全身に伝播し、地獄の業火で焼かれ  
るかの如き苦しみを与えた。まるで自身の身体が業火  
そのものになったかのような。

朦朧とする意識の中で、ジョセフは己の皮膚が硬く  
厚い甲殻に変化していくのを感じた。デモナイズだ。

だが次の瞬間にはまた人の皮膚に戻っていた。かと  
思えば次は右半身のみが変身する。全身が完全にブラ  
スレイターの姿に置き換わってしまったかと思えば、  
次の瞬間には人に戻る。変身する部位も様々で、足と  
胸元だけが紫紺の鎧と化したと思えば、次は背中と顔  
だけが異形の姿に変化する。額に片方の角だけが生え  
てくることもあった。ジョセフの意思とは無関係に、  
彼の身体は変身を繰り返した。

「ぎ……が……」

どのぐらいの時間が経ったのだろうか。やがてザー  
ギンの右手から発する燐光が消えると、それに伴い痛  
みと熱も潮が引くように消えていった。姿も完全に人  
間に戻った。痛みが消えた後もジョセフは地面に身を  
投げ出したまま、ザーギンが触手の拘束を解いた後も  
微動だにできずにいた。

（何だこれは……俺の身体は一体……）

全身が熾火のように熱く、視界は靄がかかったように霞んでいた。身体が重く、手足を動かすこともままならない。

ザーギンは立ち上がると、そんなジョセフを満足げな眼差しで一瞥した後語りかけた。

「ジョセフ、君にもし私を越える力があるのなら、これから君の身にもたらされる試練を乗り越えてみるがいい。さもなれば、君に私の行く手を阻む事など出来はしまい」

(どういう、ことだ……)

ジョセフは声に出してザーギンを問いつめようとしたが、喉からは掠れた息が漏れるばかりで言葉にならなかった。ザーギンの姿を覆む視界に最後に認めたまま、ジョセフの意識は闇の中に沈んで行った。

ジョセフが目を覚ました時、状況は最後に気を失った時のままだった。

「う……」

呻きながら軋む身体をどうにか起こすと、身体の上から自分のコートが滑り落ちた。身体の汚れも拭き取られ、乱れていた着衣も整えられていた。どうやら氣

を失っている間にザーギンが整えていったようだ。

辺りを見回してみたが、ザーギンの姿はどこにもない。あれからどのぐらいの時間が経ったのかは分からないが、体感的に見て相当な時間が経っていることは確実だろう。全身が海で溺れた後のように重く、だるかった。

それにしてもザーギンはこの身体に何をしたのでろうか。腹部の表面には外傷や特に変わった点はない。だが腹の奥に鉛を飲んだような鈍痛があった。そう強い痛みではなかったが、石か鉄の塊でも飲み込んだかのような何やら名状しがたい不快感が蠢いているような感覚があった。

気がかりではあったが、いつまでもここで座り込んだまま考えてる余裕は無い。ザーギンが放ったデモニアックは既に村を襲っているかもしれない。そう考えたジョセフは、重い体に鞭打って立ち上がると歩き出した。

## II

ジョセフがたどり着いたとき、村は地獄絵図と化していた。村の通りをデモニアックと化した村人が徘徊

しており、牧草地では同じく異形の姿となった山羊や馬が跳梁していた。

(間に合わなかつたか……)

半壊した民家を前に立ち尽くし、ジョセフは唇を噛みしめる。家の奥には血だまりの中で事切れていた老人が冷たくなっていた。次の家では血の跡だけを残して誰もいなくなっていた。更に隣の家ではデモニアックが一体潜んでおり、突然の訪問者であるジョセフに対して襲いかかつてきた。

そして今。

「この付近にいるデモニアックはそれで最後ののか!？」

見渡す限り緑の畑や牧場が広がるの田園地帯の中、ガルムを走らせながらジョセフは聞いた。

ジョセフは遭遇するデモニアックを葬りつつ、村中を駆け巡って生存者を探したが、生きている者は誰一人としていなかった。村にいたデモニアックは見つけ次第全て殲滅したが、一体でも残っていたら遠くに逃げ延びてまた人間を襲う可能性があった。

「ここから東に進んだところに融合体反応があったわ。現在、確認できるのはそれだけよ」

エレアが足元のモニターに表示された地図を指し示

す。地図上のガルムの進行方向にある一点に赤いドットが点滅しており、目的地である事を示していた。

ジョセフの進行方向のずっと先にある小高い丘の上に、一件の農家らしき家屋が小さく見える。周囲にはところどころで四角く区切られた緑の畑が広がっており、近くにそれ以外の家は無い。

「……?」

目的の家のすぐ前に到達した時、ジョセフの鼻がある不吉な臭いを捉えた。常人では感知できる筈の無い微量な臭気だったが、人ならぬ身となった者の嗅覚では間違える筈もない。目の前の家からは血の匂いが漂っていた。それも夥しい量の。

「……」

家の前にガルムを止め、目の前の家を見上げる。この地域ではありふれた古い石造りの家屋で、窓に明かりはなく、物音一つしない。

「どうやらここも全滅のようね」

「まだ生存者がいる可能性がある。確認してくる」

そう言い残すと、ジョセフはガルムをその場に残して家の中に入って行った。

家の中はおおむね予想通りの惨状だった。玄関から入ってすぐの廊下、居間、寝室、台所、ありとあらゆる

る部屋の床や壁に夥しい量の血がぶちまけられている。だが死体はどこにも見当たらない。

(犠牲になった住人はどこに行った?)

台所の流し台の脇にあるプラスチックの籠の中には皿やカップが整然と並んでおり、寝室のベッドにも使った痕跡が残っている。

未だ生活の痕跡が残るにもかかわらず、生きている者は誰一人存在せず、ぶちまけられた血の跡だけが何かの冗談のようにその存在を主張する家。これらのミスマッチが尚更のこと不気味な様相を際立たせていた。

(死体は既にデモナイズして逃走した後か? いや、家の外に出た形跡は見当たらなかった。これだけの数のデモニアックだ。何らかの痕跡が残っていないとおかしい。だとしたらまだ家の中にいるはずだが……) 家の中は相変わらず何の気配もしなければ物音もしない。家そのものが大地に蹲り息をひそめる怪物と化したかのような、死の静寂がこの空間を支配していた。

先程から腹の奥の違和感が段々と強くなってきたような気がする。いや、違和感と呼べるような些細な物ではなく、鈍くて強い痛みと化してきた。息苦しさす

ら感じる。デモニアックと対峙している間には痛みの事は意識の外に追い出されてしまっているが、こうして人の姿に戻っていると忘れていた痛みが戻ってきて己の存在を主張しているようだ。

(早い目にケリを付けないと不味いな……)

居間に足を踏み入れたジョセフは、ふと視界の端に違和感を覚えて振り向いた。壁際には大人の身長ほどもある大きな柱時計が立てかけられているのだが、その時計の針だけが止まっていた。

ガタン!

不意に背後で何か大きな物がひっくりかえるような音が鳴り響いた。ジョセフが振り返ると、壁際のテレビが立ち上がり、いや、テレビと同化したデモニアックが動き出してジョセフに襲いかかってくるところだった。

(そういうことか!)

ジョセフの身体は意に先んじて動いていた。瞬時にブラスレイターの姿に変身すると、右手に湾曲刀を顕現させ、大きく踏み込みながらデモニアックめがけて上段から一気に剣を振り下ろす。不意を打とうとしてジョセフの予想外に素早い反応に逆に不意を討たれたデモニアックは文字通り真つ二つに両断され、そのま

ま灰になってボロボロと崩れ落ちていった。

だがデモニアックが灰になるかならないかのうちに、今度は台所からガシャンと物が壊れるような音がした。冷蔵庫や洗濯機が唸るようなモーター音と、同時に重い物を引きずるような固い音が鳴り響く。ジョセフは今しがた倒したデモニアックが完全に灰と化したのを確認すると、音の聞こえた方向に突貫した。

台所に足を踏み入れるや否や、先ほど倒した者より一回り小さい二体のデモニアックが一斉に飛びかかってきた。

正面からは両腕の先端に肉切り包丁を一本ずつ融合させた個体、斜め前からは大振りの鉈を右手に帯びた個体がそれぞれジョセフに襲いかかる。

二体を同時に殲滅するのは不可能と判断し、ジョセフは左手から光の鞭を伸ばし、縦横に振るう。当然ながら狭い空間の中では標的にまともに当たらずに周囲の壁や床、家具を派手な音と共に損壊させただけで、デモニアック達にはほとんどダメージを与える事ができなかつたが、彼らを怯ませるには十分だつた。

二体のデモニアックが一瞬動きを止めたその隙に乗じて、一番手近にいた鉈と融合した一体の右肩から左脇腹にかけて両断する。斜めに身体を真っ二つにぎれ

たデモニアックは先ほど居間で倒した一体と同様に、切断面から崩れ落ちていった。

ジョセフが刀を引き戻すよりも先に、包丁と融合したデモニアックが両手の得物を振りかざし、斜め後ろからジョセフに襲いかかってきた。返す刀でその一体も両断する。

(さっきまでは気配すらなかつたと言うのに、一体どこから……?)

敵勢が全て完全に沈黙したのを確認後、ジョセフは周囲に視線を走らせた。床一面には食器や食物に混じつて、粉々になつた金属片のようなものが散乱していた。どうやら、冷蔵庫や食洗機といった家電と融合して擬態していたようだ。

再び足元に視線を戻すと、今しがた斃したデモニアック達は二匹とも塵と化していた。足元に散乱した塵の山を見てジョセフは思う。いずれも身体の大きさからして生前はまだ幼い子どもであつたであろう事が推測できる。そんな幼子の命までも奪い、化け物に変えてしまつたのだ。

このような酷い事態を引き起こした張本人であるザーギンへの怒りと同時に、ジョセフの中には深い哀しみが沸き上がってきた。自分の知っている、慈愛に

溢れた青年だったザーギンはもう居ない。そのことを改めて突き付けられた思いだった。

ガシャン！

居間の方からガラスの割れる大きな音が聞こえてきた。次いで外の砂利の上を何者かが走っていくような音も。

「しまった！」

その音を聞くや否や、ジョセフは一声叫ぶと再び居間に向かって突進していた。

居間に飛び込んでまず目に入ったのは、窓枠が完全になくなり虚ろな大穴と化した窓だった。先ほど柱時計があつた場所には何もなくなり、代わりに周辺の床に大小様々な形の木片や金属片が散乱している。どうやら柱時計にもデモニアックが隠れていて、それが窓から逃走したらしい。

(どこだ？ どこに逃げた？ まだ遠くには行っていないはずだ)

ジョセフは窓枠を飛び越えて家の外に躍り出た。外にはガラムを停めてある。万一乗っ取られでもしたら雑魚相手でも圧倒的に不利になる。それでなくても遠くに逃げられたら厄介だ。一刻も早く追いついて止めをささなければならぬ。

不意に家の裏手からエンジン音が聞こえてきた。ガラムではない。ジョセフが裏手に向かうと、母屋に寄り添うような形で納屋があつた。エンジン音はそこから発しているようだ。

と、次の瞬間、納屋の壁を突き破り、中から一台のトラクターが飛び出して来た。その運転席に埋まり込むようにして半ば同化しているのが、先ほど逃走したと思われるデモニアックであることをジョセフは確認した。

トラクターはエンジン音の唸りを上げ、その車種ではあり得ない速度で猛然とジョセフに向かって突っ込んできた。ジョセフはトラクターの進行方向から大きく飛び退いて攻撃を躲そうとしたが、トラクターの方も車体を捻るようにして進路を変更してきた。

避けきれない。そう判断したジョセフは跳躍すると、車体のエンジン部の上に着地した。トラクターはそのまま畑に突っ込むのも構わず遮二無二暴走し、ジョセフを振り落とそうと車体を揺らしながら暴れ牛よろしく滅茶苦茶な方向に走り続けた。

「く………そつ………！」

ジョセフはどうかフロントガラスを破壊し、運転席と融合したデモニアックに剣を突き立てようとした

が、振り落とされないようにしがみついたので手一杯で剣を手にすることもままならない。デモニアックの方もどうにか振り落とそうとするものの、車体の上にいるジョセフに対しては攻撃する手段を持たない。

双方共に手の打ちようが無い拮抗状態のまま、トラクターは畑と言わず道と言わず進行方向にあるもの全てをお構い無しに踏みつけ破壊しながら暴走し続けた。

小高い丘をいくつも越え、トラクターの周囲には畑よりも木の方が多くなってきた。村から離れて山の方に近づいてきたらしい。

不意にトラクターがぐんぐんとつのめり、動かなくなつた。タイヤが地面の穴ぼこにはまり込んで身動きがとれなくなつたのだ。その機を逃す手は無い。ジョセフはエンジン部の上に膝断ちになり、剣を逆手に構えて振り上げ、運転席もろともデモニアックを串刺しにしようとした。

だがジョセフが剣を振り上げた途端に車輪が穴から脱出した。トラクターは渾身の力を振り絞るようにして再び動き出し、急発進した。ジョセフは今度こそバランスを崩して車体の上からはじき出された。

が、あわや転落という瞬間、ジョセフは運転席右側

の柱を掴んで転落を免れ、車体の右側に左手だけでぶら下がる形になる。トラクターは不安定な姿勢になつたジョセフに決定打の一撃を与えるべく、今まで以上に激しく車体を揺すりながら突進した。進む先には一本の太木。車体と木の間にはジョセフを挟んで押しつぶす気だ。

「くっ……！」

ジョセフは右手から光の鞭を放ち、進む先にある木の枝に鞭の先端を絡めた。車体を掴む左手を手放すと、光の鞭は一気に縮んでジョセフの身体を中空に引き上げる。トラクターが真下に来たところで鞭を剣に換え、落下しながら真下にあるトラクターめがけて一気に振り下ろした。

ジョセフの剣はトラクターの屋根もろともデモニアックを脳天から両断した。真つ二つになつたデモニアックが断末魔の悲鳴と共にボロボロと崩れていくのを視界の端で見届けると、ジョセフはトラクターの天井を蹴つて大きく跳躍する。

その瞬間にトラクターは太木に衝突し、ジョセフが地面に着地すると同時に爆発炎上した。

ジョセフが身を起こした時、トラクターは黒い煙を上げて燃え盛っていた。衝突された木は無惨にも根元

から折れてしまつてゐる。恐らくデモニアックの残骸も、文字通り痕跡すら残さずに焼きつくされてゐることだろう。敵が完全に沈黙したのを確認し、ジョセフは変身を解除した。

どくん

「ぐっ……!!」

変身を解除した途端、ジョセフの腹の奥でこれまでにない強烈な痛みが走つた。引き裂かれるような激痛に、立ち上がりかけていたジョセフは思わずその場に腹を抱えてしゃがみ込み、膝をつく。

「ぐっ……ああ……つ」

どく、どく、どく、どく……

下腹が異様な熱を持ち、そこにもう一つの心臓が生まれたかのように激しく脈打つていた。あまりの痛みでジョセフは地面に横倒れに倒れ込み、海老のように身体を丸めて悶絶する。

(何だ、これは……)

腹部の脈動は、もはや心臓の鼓動などという生易しいものではなく、まるで腹の中で小さな別の生き物が蠢いているかようだった。

苦しくてたまらない。ジョセフは上着の前をただけりと、中に着ていたプロテクターを外した。そして

シャツをまくり上げて自分の腹を見たとき、そこには信じがたい光景があつた。

「あ……ああ……」

ジョセフの腹は明らかに膨らんでゐた。それも下腹の方だけが、拳一つ分ほどの塊が突如として発生したかのような異様な膨らみを持つていたのである。

膨らんだ己の腹を見て、ジョセフの理性は今度こそ崩壊寸前にまで追い詰められた。痛みよりも己の身に起きている事に対する恐怖で精神が焼き切れそうになる。喉が痙攣して上手く呼吸ができない。大きく開いた口からは、呼吸の仕方を忘れたかのようなこちない掠れた音が漏れるばかりだ。精神が引きちぎられる事しか出来なかつた。

### III

ザーギンが林の近くで倒れてゐるジョセフを発見したのは、それから数時間後の事だった。

ジョセフは大木の根元に仰向けに身を投げ出して横たわつてゐた。その腹は異様な大きさに膨れ上がつており、ジョセフの苦しげな呼吸に合わせて上下してい

る。虚空に向けられた目は何も見えていないかのよう  
に虚ろだった。

「気分はどうか、ジョセフ」

ザーギンが近づいて声をかけると、ジョセフは弾か  
れたように顔を上げ、ザーギンを睨みつけた。

「ザーギン……貴様、俺の体についた何をした!？」

ザーギンはジョセフの傍らにかがみ込むと、ジョセ  
フの膨らんだ腹にそつと手を触れた。

「おやおや、自分の身体の事だろう？ そのぐらい、  
君には分かっているものだとはばかり思っていたが」

「答えろ！ ザーギン！」

ジョセフは脂汗を流しながらなおも問い詰める。そ  
んなジョセフに慈しむような眼差しをくれてやりなが  
らザーギンは答えた。

「ならば教えてやろう、ジョセフ。君はその身に、僕  
の子を受胎したのだよ」

「受胎……!」

ザーギンの言葉に、ジョセフの目に決定的な絶望の  
色が浮かぶ。

「馬鹿を言うな！ そもそも男がどうやって……」

「君の体内のペイルホースに干渉し、ナノマシンの力  
で君の持つ体細胞の一部を変換して卵細胞に変えた。」

いや、君の細胞を基にして生成したと言ったほうが近  
いかな。そこに僕が注ぎ込んだ精子を受精させたとい  
うわけだ」

ザーギンはジョセフの傍らにかがみ込んだまま、膨  
らんだジョセフの腹を愛おしげに撫でている。腹の重  
さと痛みで動く事すらできないジョセフはその手を払  
いのける事も出来ず、成されるがままでいるしかな  
い。腹の中の胎児が時折蠢くのを確認する度に、ザー  
ギンは嬉しそうに微笑んだ。

「受精卵は君の体内を移動させ、腹膜に着床させた。  
君の血液中を流れるペイルホースは私が持つそれと同  
じものだからね。僕の血液中のナノマシンと共鳴させ  
れば制御するのも不可能なことではない。肛門から精  
液と共に君の体内に送り込んだ僕のナノマシンも同様  
だ。元々私の体内にあったものだから、君の持つナノ  
マシンを操るよりも容易い」

ザーギンは説明を続けた。激高するジョセフとは対  
照的に、その口調は講義でもしているかのように淡々  
としており、また同時に幼い我が子に語りかけるよう  
に慈愛に満ちていた。

「嘘だ、あれからまだ一日も経っていないというの  
に、そんな馬鹿な事があるものか……!」

「そう、通常の人間の妊娠期間はおよそ九ヶ月だ。だが君はもはや人間ではない。君がブラスレイターの姿になることで体内のペイルホースの活性化が促され、胎児は極めて早い速度で成長する。変身中は人間の時ほど痛みを感じないようになっているから戦っている間には気付かないだろうが、人の姿に戻った後にも活性化の効果は残り続ける。ことに長い時間に及んだり、極度の興奮状態に陥った後は文字通り爆発的な成長をすることになる」

「貴様、その為に村の人間をデモニアックに……！」  
ジョセフの顔に浮かぶ絶望と怒りの色が決定的なものになる。何もかも仕組まれた事だったのだ。

「そうだ。あの村はこれから生まれてくる君のお腹の赤子への生け贄だ。その甲斐あつて赤子は間もなく母体の腹を食い破つて自ら生まれ出てくるだろう。もちろん、普通の人間であれば間違はなく死んでしまうだろうが、人ならざる身となった君ならその程度では死にはしない。案ずるには及ばないよ」

「ふざ……ける……な……！」  
ジョセフが絶え絶えの息の下から絞り出すような声を上げた。その声は絶望と怒りで震えていた。

「そんな事の為に……貴様は多くの人間の命を犠牲に

したというのか……！」

「遅かれ早かれ、世界は滅びなくてはならない。新しく生まれ変わる世界には新しい人類が必要だ。旧き人類の持つ愚かさとも罪とも無縁の、生まれながらにして聖別された神の御子がね。私にはその新たなる人類の始祖となる義務がある」

「思いがりだ……！ そんなに……子供が……作りたいなら……貴様が……一人で……孕んで……一人で……生めば……いいだろうに。貴様は狂つている……」

「成る程、それも良い考えだ。二人目は僕が生むのも悪くはないな」

本気とも冗談ともつかぬ口調でザーギンは呟いた。その独白に対してか、あるいは胎動のおぞましい感触に対してか、ジョセフが頬を引き攣らせひくりと身を震わせた。

「だけどね、ジョセフ。僕の細胞だけを元にして胚を作ったとしても、生まれてくるのは僕と寸分違わぬ遺伝子を持ったクローンに過ぎない。それでは駄目なんだよ。ただのコピーでは我々を越えるような存在は生まれない」

ジョセフは何の反応も返さない。その目は熱に浮か

されたように茫洋と霞み、呼吸も先ほどより一段と激しくなっている。

「だが、他の遺伝子との組み合わせ次第で、更なる進化の可能性を持ったブラスレイターが生まれるかもしれない。それには君の遺伝子が理想的だった」

ザーギンが嬉しそうに語っている間にも、ジョセフの痙攣は益々激しくなり、喉の奥からは声無き悲鳴のような呼吸を洩らし始めた。

「最も未知なる存在たるアンドロマリウスに適合した君の遺伝子と、最も理想的とされるバアルに適合した僕の遺伝子。それらを併せ持つて生まれてくる子は、一体どんな姿をしているのだろうか」

「う……………う……………ぐ……………あああ……………かああ……………」  
やがてジョセフの声無き悲鳴は咆哮のごとき苦悶の声に取つて代わつた。目は限界まで見開いたまま喉を大きく反らして身を振り、己の腹をかきむしり始めた。腹の動きも胎動と呼べるような僅かなものではなく、端から見てはつきりと分かるほどに激しくなつてきている。

「あああああ……………ぐああ、がああ、ああ……………あああ」  
ジョセフの顔や身体に青い光の線が走り、デモナイズの兆候を見せ始めた。だが完全に変身しきることは

なく、体表の一部のみが中途半端に変身したまま全身が青い光を帯びるに留まつた。

「苦しいかい、ジョセフ。もう少し、もう少しの辛抱だよ……………」

ザーギンはジョセフの上体をしつかりとかき抱いた。ジョセフはしがみついたザーギンの身体を背中と言わず腕と言わずかきむしる。ザーギンの上着とシャツはジョセフの鋭い爪に破られ、その下の皮膚も引き裂かれて肉が抉られ血が滲む。だがザーギンはジョセフの身体を抱いたまま、手放すことはなく、より一層強い力で抱きしめる。

「そうだ、それでいい。その痛み、少しでも僕に分けておくれ。たとえそれが君の痛みには遥かに及ばなくとも……………」

ジョセフの爪に新しい血を流しながらも痛みを感じる素振りを見せず、ザーギンはジョセフを幼子をややすように抱き続けた。ザーギンの血はジョセフの身体を濡らし、赤く染めた。

「あああ、ぐうう、ぐああ、あああ……………ぎやああああああああああーっ！」

一際高い咆哮が辺りの空気をふるわせたその時、ジョセフの腹が内側からバリバリと裂け、中から鮮血

で鈍くぬらぬらと光る赤子が頭を出した。

「ううう、ぐるるるる、ぐ……うう」

赤子はメリメリと皮膚の亀裂を内側から広げ、ゆつくりと這い出てくる。ジョセフは口の端から血混じりの泡をこぼしながら頭を後ろにそらせてくぐもつた呻き声を上げた。人間であれば出血と痛みのショックでとうに死んでいてもおかしくない状態だが、人ならざる身は意識を失うことすらままならないようだった。

「あ……が……が……あ」

血に塗れた赤子がほぼ完全に這い出した頃、ザーギンの腕を挿んでいたジョセフの腕から力が抜けてだらりと地面に垂れた。激しく呼吸を繰り返してはいるが、目は焦点が合わずどろりと濁っている。

脱力したジョセフの身体を地面にそつと横たえた

ザーギンは、腹の上からゆつくりと慎重に赤子の身体を引き上げた。赤子の体表は銀色の硬い装甲に覆われていた。臍帯が外れた瞬間、赤子はおよそ人とは思えない金属じみた産声を力の限り上げ始めた。

ザーギンは血塗れの赤子をそつと抱くと、破れた腹から腸と血を零し、悲鳴も枯れ果てて息も絶え絶えのジョセフに祝福するように語りかけた。

「生まれたよ、ジョセフ。僕と君の子どもが。新たな

る人類の最初の一人が……」

F  
i  
n

## 後記

こんにちは、古道です。

801でありがちな妊娠出産ネタをブラスレイターで大真面目にやったらどうなるかというのをやってみたら、なんかもう予想通りというか予想以上に凄惨極まりない事になってしまいました。とはいえジョセフは本編中でもザーギン様に脇腹抉られたりツヴェルフの人体実験で絶叫しまくってたから本編見て平気だった人なら大丈夫……だと思ふ。

例によって見切り発車で書き出した結果としてギリギリまで迷走しまくった揚げ句、色々トンデモ理論炸裂しまくりな本ですが（生物工学的にもザーギン様の理論的にも）、何とか納得の行くところまで漕ぎ着ける事が出来ました。書いてる途中でいろいろと相談に乗ってくれたり愚痴を聞いてくれた皆様、読んでくれた方々に感謝申し上げます。

2009年12月27日 古道京紗 拝

## ソロモンの二重螺旋

発行日 2009年12月29日  
発行者 古道京紗  
サークル Pale Mag  
<http://palemag.kazeki.net/>  
[schwarzewald@gmail.com](mailto:schwarzewald@gmail.com)

Presented by  
**Pale Mag**